

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

センター長あいさつ

「平和」、「インカルチュレーション」、
「現代思想と哲学」、「宗教リテラシー」を
キーワードにしてのキリスト教研究の展開

RCCセンター長 山本 俊正 商学部教授



今年度四月より、キリスト教と文化研究センター(RCC)のセンター長に就任いたしました山本俊正と申します。よろしくお願ひいたします。

キリスト教と文化研究センターは、一九九七年に発足し、一八年の歩みを続けてまいりました。センター規程には、「キリスト教と人間・世界・文化・自然の諸問題に関する総合的な調査・研究を行うとともに、本学のキリスト教主義教育の内実化を図

ることを目的とする」(第二条)と、その目的が定められています。また、運営の主体となるセンター長・副長・主任研究員は、学部宗教主事と神学部教員から選ばれ、その役割を担っています。センター活動の目的に沿って、発

また、二〇〇二年以降、複数の共同研究プロジェクトが組織され、多岐にわたるテーマを設定しています。約二年の期間を定め、共同研究を進めています。最近の共同研究の成果として注目されたものとして、「ミナト神戸に宗教多元主義を探る」プロジェクトがまとめた、『ミナト神戸の宗教とコミュニティ』(二〇一三年三月、神戸新聞総合出版センター出版)が、井植文化賞(報道出版部門)を受賞しました。また、「本学のキリスト教主義教育の内実化」という目的に沿って、二〇一一年から「関西学院におけるキリスト教主義教育の展開」共同研究プロジェクトが設けられています。二〇一四年度には、関西学院創立一二五周年を記念して、『建学の精神考 第四集』を編集、刊行いたしました。

今年度より、昨年度から継続の「東アジアの平和と多元的な宗教・NGO・市民社会の役割」プロジェクトに加え、

また、「日本における礼拝のインカルチュレーション」、「キリスト教と現代思想・エコノミーと他者」、「キリスト教主義教育の展開—キリスト教主義学校における宗教リテラシーのあり方をめぐって」の合計四つの研究プロジェクトが立ち上がっています。また、センターでは公開の講演会及び「RCCキリスト教講座」を開催しています。どうぞご参加ください。(詳細は、本ニュースレターのプロジェクト紹介、報告欄をご覧ください)

末筆になりましたが、去る五月一四日(木)に、センター長を歴任された栗林輝夫先生(法学部教授・宗教主事)が天国に旅立たれました。栗林先生のセンターへの多大なるご貢献と、そのお働きに感謝するとともに、先生の残された成果を活かしながら、センター活動に従事したいと願っています。皆様のご協力とお支えをお願い申し上げます。

■研究プロジェクト報告

「キリスト教と現代思想…エコノミーと他者」

研究代表者 柳澤 田実 神学部准教授

一九七〇年代以降のフランス・イタリアの哲学・思想において、ユダヤキリスト教的問題系の回帰ともいえる現象が見られる。これらの哲学者たちは、E. ニーチェやK. マルクスらによる宗教批判や唯物論といった切断を経、またあらゆるイデオロギーを相対化する構造主義を経由した上でなお、あえてユダヤキリスト教的な主題を取り上げていると考えられる。こうした哲学の側からの神学への接近は、かたや神学分野で、抽象的な組織神学以上に、具体的な社会問題に密着した実践神学が盛んになっているという現実といわばキアスムになっており、その意味でも興味深い。

フランス・イタリア現代思想において、ユダヤキリスト教的問題は多くの場合二つ

の系で登場する。一つはエコノミー論であり、政治、暴力、正義、法といった問題系と連なりながら展開している。もう一つが他者論であり、これはE. レヴィナスの影響によるところが大きい。二つの系は完全に分離しているわけではなく、倫理的問いとして相互に関連し合っている。

この研究プロジェクトでは、J. デリダ、R. ジラール、G. ヴァッティモ、J. L. マリオン、E. レヴィナス、G. アガンベンのテキストの読解を行い、彼らの議論のなかでキリスト教に関わる問題がどのような必然性において、登場するのかを精査するとともに、同時代のドイツの神学との比較検討を行う。またこれらの哲学者たちのテキストが非キリスト教圏の日本で熱心に受容されている現実もふま

え、彼らのテキストから浮かび上がるキリスト教のアクチュアリティについても考察してみたい。

本プロジェクトは、二〇一五年度から二〇一六年度の二ケ年実施する予定である。近現代のキリスト教思想、神学の専門家のほか、現代フランス・イタリア思想、ユダヤ思想の専門家らをコアメンバーとし、必要に応じてゲストスピーカーを招聘する。特に初年度は、コアメンバーによる各分野から見た状況の報告や、本テーマにかかわる重要な文献のレビューをおこなう予定である。

■研究プロジェクト報告

「日本における礼拝のインカルチュレーション」

研究代表者 中道 基夫 神学部教授

明治時代に主としてアメリカから日本に入ってきたキリスト教は、日本文化と出会い、まず翻訳された。その翻訳がキリスト教理解に変容をもたらすと共に、日本文化にも影響を与えてきた。Love が中国で「愛」と訳され、それが日本に「愛」として伝えられ、日本人に受容されたとき、そこには二重の変化の可能性が見られる。はたして「Love」と日本の「愛」、中国の「愛」と日本の「愛」とは同じものなのか。おそらく、「Love」は日本語の「愛」に新たな理解を与えたことであろう。

このような変化をキリスト教の瑕疵として消極的に捉えるのではなく、キリスト教理解の豊かさとして積極的に評価していくのがインカルチュ

レーション(文化内開花)という考えである。

インカルチュレーションは芸術や建築などにも見られるが、本研究は、日本に伝えられた賛美歌や礼拝の言葉の受容と変化のプロセスに注目し、その実態や神学的意味を問うことを目的としている。神学はもちろんのこと、儒教研究、社会学の立場からもアプローチし、多角的な視野を持つこの問題に取り組んでいくことを計画している。

インカルチュレーションは、キリスト教のメッセージが直面する文化の中で受肉(インカネート)しようする不断の運動である。それゆえ本研究が現代のインカルチュレーションを促すものであることを願っている。



吉岡記念館3階のRCC共同研究室

■研究プロジェクト報告

「キリスト教主義教育の展開ーキリスト教主義学校における宗教リテラシーのあり方をめぐって」

研究代表者 舟木 讓 経済学部教授

本プロジェクトは、日本ならびに海外における宗教リテラシーの現状ならびに国内外のキリスト教主義学校における宗教リテラシーの現状を調査し、また「合理的配慮」という概念の誕生に代表される宗教リテラシーに関するこれまでの歴史をたどることで、現代におけるそのあり方に対する考察を行い、また実行可能な取り組み方を具体的に提案する事をその目的として発足した。宗教リテラシーという概念はグローバル化する今日の世界において極めて重要な概念であり、実際にどのような形をとるべきかは様々な場において喫緊の課題となっている。また本学においても宗教的に「合理的配慮」を必要とする構成員が存在しているが、正式な形でその問題に対する論議がなされたことがないのが現状である。以上のことを鑑みた時、

特に「キリスト教主義」という一つの宗教的立場を有する本学においてこの問題に対してどのような態度をとるのかを、研究の主題とすることは極めて今日的な課題であり、また「キリスト教と文化」を研究目的とする本研究センターの研究課題にふさわしいと思われる。具体的計画としては、初年度にフィールド・ワークやアンケート調査、専門家を招いての研究会等を通じ、現状の情報を集約し、二年目は初年度に収集した情報・資料等をもとに、本学における宗教リテラシーのあり方と、その実現に向けて必要な制度・設備等について、研究者のみならず、本学の関係部署の職員の方々にも適宜情報と意見をいただき、より現実的なあり方を同時に目指す方向で進めていく予定である。

■研究プロジェクト報告

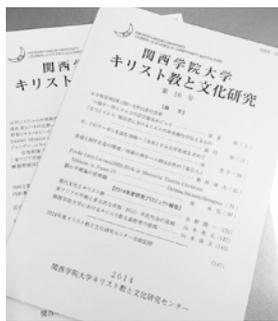
「東アジアの平和と多元的な宗教・NGO・市民社会の役割」

研究代表者 山本 俊正 商学部教授

二一世紀に入り一〇年以上が過ぎた今日、東アジアは、世界で最も高い経済成長を達成し、域内の経済は相互に強く結びついている。東アジアはお互いをかけがえのない経済のパートナーとしている。しかし、他方では、近代以来の歴史的経緯から深刻な分断が続き、冷戦状況が残る中、相互信頼は非常に弱いと言える。本研究プロジェクトは、昨年、一昨年に引き続き、東アジアにおける平和実現のための国家間の対話と協力をその視座に置くと同時に、国家以外の主体、すなわち自治体や、市民社会、NGO、宗教者等による協力及び信頼醸成の働きに注目し、その可能性を探求する。

初年度は学内外者による研究発表を行い、研究テーマの理解を深めた。昨年度はワー

クシヨップ形式の研究会を三回行った。今年度は、それぞれのワークシヨップの成果を踏まえ、これまでのまとめの作業を研究員の継続的な研究発表と合わせて実施する。ワークシヨップ参加者の参加前と参加後の意識変化の調査研究等、フォローアップに主眼をおいて進める。また研究員による個別研究についても未発表分があるので、これまでのRCCの平和研究及びエキユメニカルな視点を活かして、研究員の関心領域に基づく研究発表を行う予定である。



RCCの紀要『キリスト教と文化研究』

関西学院大学キリスト教と文化研究センター

二〇一五年度構成員

■センター長

山本 俊正 商学部教授(宗教主事)

■センター副長

中道 基夫 神学部教授

■主任研究員(四名)

柳澤 田実 神学部准教授

加納 和寛 神学部助教

舟木 讓 経済学部教授(宗教主事)

前川 裕 理工学部専任講師(教主事)

■評議員(八名)

山本 俊正 センター長

中道 基夫 センター副長

柳澤 田実 主任研究員代表

土井 健司 神学部教授会代表

村瀬 義史 学部宗教主事代表

石浦菜岐佐 教務機構長補佐

永田雄次郎 キリスト教養育委員会代表

嶺重 淑 学長が任命した専任教員

編集後記



今回巻末に掲載した栗林先生の業績は、まさにRCCの理念を実現したものといえる。先生の思いを受け継ぎつつ、活動を続けていきたい。(M)



故 栗林 輝夫 (法学部教授・宗教主事) RCC関係業績一覧

■センター長	1998年度 2005年度～2009年度	■センター副長	2003年度～2004年度
■主任研究員	1997年度 1999年度～2001年度春学期	■研究員	2010年度～2012年度

関西学院大学『キリスト教と文化研究』(『キリスト教学研究』を含む)

発行年月日	号数	頁	タイトル	備考
1998.03.31	1	49-68	民話・ユング・聖書—日本民話の神学』補論—	キリスト教学研究
1999.03.24	2	1-3	献呈のこぼ	キリスト教学研究
1999.03.24	2	19-45	見よ、神は谷中にあり(上)—田中正造の解放神学—	キリスト教学研究
2003.03.29	4	11-55	「近代後」を探るポストモダン神学—現代アメリカの神学事情	
2004.03.29	5	53-109	ポストリベラル神学が語る共同体の物語—キリスト教新保守主義のめざすもの	
2005.03.29	6	57-91	解放神学の選択・神は貧しい者を偏愛する(上)—マルクス主義から民衆の宗教へ	
2010.03.31	11	59-90	アメリカのアジア神学と日系神学(上)—オリエンタリズムからポストコロニアルへ—	
2011.03.28	12	83-115	「帝国論」におけるイエスとパウロ	
2012.03.31	13	37-78	原発とテクノロジーの神学	
2015.03.31	16	45-74	原発と田中正造の環境／技術の神学—人間は自然の「奉公人」	

執筆

2004.09.11	『アメリカの戦争と宗教—アジアのまなざしから』(新教出版社) 01 「『ブッシュの戦争』とキリスト教原理主義—グローバリズムとアメリカの宗教戦略」 解題 キリスト教「帝国」アメリカを読む
2005.03.31	『暴力を考える—キリスト教の視点から』(関西学院大学出版会) まえがき、第1部現代の暴力と宗教 第1章「ブッシュの戦争」とキリスト教の正戦論—対イラク戦争は正しい暴力行使だったか?—
2009.09.25	『キリスト教平和学事典』(教文館) まえがき、【悪】、【ジェノサイド】、【社会主義】、【審判】 【ホームレス】、【民主主義】、【良心的兵役拒否】
2010.01.13	『平和創造への道』(新教出版社) まえがき
2013.04.15	『ミナト神戸の宗教とコミュニティ』(神戸新聞総合出版センターのじごく文庫) 第九章 賀川豊彦と賀川記念館—もう一つのキリスト教、コラム・神戸の街の映画と宗教

発題

年月日	タイトル	
1998.07.21	研究会 第3回 マルコムXと西光萬吉	
1999.04.20	父母のためのキリスト教講座 春学期第1回 聖書と民話の中の女性 I	
1999.06.01	父母のためのキリスト教講座 春学期第2回 聖書と民話の中の女性 II	
1999.06.27	父母のためのキリスト教講座 春学期第3回 聖書と民話の中の女性 III	
1999.08.03	父母のためのキリスト教講座 春学期第4回 聖書と民話の中の女性 IV	
2003.06.04	RCCフォーラム 第21回 「ブッシュの戦争」とキリスト教原理主義—グローバリズムとアメリカの宗教戦略	
2004.01.23	研究プロジェクト「暴力とキリスト教」研究会 2003年度第7回 現代アメリカの宗教と暴力	
2008.10.06	父母のためのキリスト教講座 秋学期第1回 映画は聖書物語でいっぱい! スピルバーグ監督の『E.T.』はイエスの生涯 マルコ福音書5章25-34節	映画と文学で綴る聖書物語1
2008.11.10	父母のためのキリスト教講座 秋学期第2回 人類最初の殺人事件は尊属殺人だった エリア・カザン監督、ジェームス・ディーンの『エデンの東』 創世記4章1-12節	映画と文学で綴る聖書物語2
2008.12.01	父母のためのキリスト教講座 秋学期第3回 カリフォルニアは「乳と蜜の流れる地」? ジョン・スタインベック原作、ジョン・フォード監督の『怒りの葡萄』 出エジプト記3章7-10節	映画と文学で綴る聖書物語3
2008.12.22	父母のためのキリスト教講座 秋学期第4回 天国の食事は三つ星のグルメ料理 アイザック・ディナーセン原作、 アクセル監督の『バベットの晩餐会』 マルコ福音書14章22-26節	映画と文学で綴る聖書物語4

父母講座100回記念
講座終了後100回記念祝会開催
(レセプションホール)参加57名